



生き物のからくり
南海部 覚悟

目次

| | |
|-----------------|----|
| プロローグ | 1 |
| (1) | 3 |
| (2) | 5 |
| (3) | 7 |
| (4) | 9 |
| (5) | 11 |
| (6) | 13 |
| (7) | 15 |
| (8) | 17 |
| エピローグ | 19 |

プロローグ

奥寺 淳は、その滑らかなガラスの前に立ち竦んでいた。

ショールームの窓にでも使えそうな、厚くて巨大なガラス板が地面に突き刺さって立っている。

目を凝らして見つめているのは、ガラスそのものではない、表面に貼り付いた小さな金属の矩形、滑らかなガラス板一面無数に付着している。

ルーペグラスを鼻に掛け、採取キットを構えてピンセットで矩形の上部を引っ搔く、簡単に剥がれてキットの中に転がり落ちた。

「厚さがあるから印刷じゃないな・・・。」

しまなみ海道、因島の山中である。

ミカン農家の住民から、沢の水が紅く染まっている、腐敗臭が漂ってコバエが大量発生しているとの通報があり、対応した所轄署が、採取した水からルミノール反応を確認した。奥寺の指揮で SRI が臨場し沢の上流を調査すると、不法投棄された医療機器の山が見つかった。

「大量の採血管が見つかりました、半数ほど破損して中の“全血”が流れ出ています。」

若いスタッフの一人が報告に来た、数匹のコバエがうるさく纏わりつく。

「腐敗臭は外科医療廃棄物が原因のようです、中には初期の中絶胎児のようなものもありました。医療廃棄物以外にもいろんなゴミが捨てられていて、大分以前から不法投棄されていたんでしょうね。酷いことをするもんだ！」

「細大漏らさず指紋採取してくれ、他に廃棄元を特定できそうなものは見つからんか？」

指示を受けたスタッフが奥寺の採取キットを見つけると、「———何ですかこの小さいの、裸のシリコンチップ？」

「其処のガラス板に大量に貼り付いている、大きくて大変だがそのまま持ち帰ろう。それにしても煩いコバエだ！」

思わず叩いた柏手が一匹を捕えた、そっと開いた掌を覗き込んだ奥寺が、喉から絞り出すような呻き声を上げた。

広島市内の某総合病院である。

産科病棟のナースステーションに隣接した新生児室には、今日生まれたばかりの赤ちゃんが、純白の寝具にくるまれて気持ちよさそうに寝息を立てている。

中にはむずかって可愛い泣き声をあげる赤ん坊もいた。

「36-Bの赤ちゃん、双子じゃないの？」

タブレットを操作しながら、看護師の一人が同僚に尋ねる。

「なんかおかしい？」

「二人並んで寝てるけど、入力はそうになってないわ。」

「じゃ、入力ミスよ。うちは不妊治療後の出産が多いから、多胎児の入力よく間違えるの……。」

「——訂正しておくわね。」

「さっき廊下をコバエが飛んでたわ、新生児室に入れないようにね。」

(1)

カップルが広島大学附属病院、穴見の研究室に呼ばれたのは、残暑もやっと落ち着いた9月末のことである。

一般病棟の背後に隣接する古い研究棟の玄関まで、珍しく女医が出迎えに来ていた。

「——ちょっと見てもらいたい遺体があるのよ。」

何か言いだしかけた笑子の口を制して、穴見が口火を切った。

「玲ちゃん、あなた確か内閣官房にパイプがあるって言ってたわね……。」

「三浦官房副長官のことですか？」

「政府に動いてもらわないといけない事案かも知れない……。」

女医の眼差しが、いつになく真剣だった。

研究棟地階のMorgue（遺体安置場）の区画は、独特の甘ったるい刺激臭に包まれていた。前室で重量感のある高機能防護服を身につける、何時もより嚴重なバイオハザードに躊躇する。

安置室のステンレスグリッドの内壁から、2 m程のパレットを引き出す、横たわった半透明バッグの青いジッパーを引き下ろす、若い女性の白い遺体だった。

「3日前に交通事故（自損事故）で亡くなった遺体よ。死因は事故衝撃による脳挫傷、シートベルトしてなかったみたい、頭部以外の外傷は太腿内側の裂傷、足元のパーツに引掛けたみたいね。」

「あれ？ 裂傷部位が大きく膨らんでいますよ！」

薄いゴム手袋の両手で、遺体の股間を開きながら笑子が声を上げる。

傷口が大きく開いた内側から赤く膨らんだ組織を触ったとたん、悲鳴を上げて飛び上がった。

「——何これ！ まだ暖かい！」

「そうなの、その部位だけ代謝が継続している。まだ生きているの……。」

「まだ生きてるって……3日前に交通事故で亡くなった遺体じゃないんですか！」

バイオハザードを抜け、穴見の個室に引き上げて来たとたん、笑子がまくしたてる。

「検視官は、瞳孔反応と頭部の外傷、脳の損傷状態から死亡認定したみたい。心停止後も一部組織の代謝が数時間維持されるのはよくあることだわ、でも3日間というのは考えられない……。」

「代謝のエネルギーはどうするんですか？ ガス交換（呼吸）はどうしてるんですか？ 説明つかないじゃないですか。」

笑子がたたみ掛ける。

「其れだけじゃ無いのよ・・・受け入れ時から、膨らみの体積を計測しているんだけど、少しづつ大きくなってると・・・成長してるのよ。」

「――遺体が、自分の傷を修復している？」

玲子が低い声で呻く。

「そうじゃないと思う、MRI で視ると遺体の太腿に胎盤のような組織が生成されている、遺体と膨らみの DNA 比較鑑定を依頼しているけど、別の個体のような気がするの、まるで寄生体か胎児・・・。」

何時もは気丈な女医が、おろおろと目の前のソファに崩れ落ちた。

「――胎児？」

玲子は口にした自分の言葉が、信じられなかった。

(2)

重苦しく長い沈黙が続いた。

押し黙った3人の息遣いが、部屋の空気を一層沈みこませる。

突然、女医のメール着信音が長い静寂を打ち破った。

「思った通りだわ・・・あの膨らみは、やっぱり胎児だった。DNA鑑定で仏さんとの血縁が証明されたわ。」

「本人自身の組織ではなくて、子供だって云うんですか！」

「一体あの遺体は・・・本当に人間なんですか？」

低い声で玲子が呻く。

「其れなんだけど・・・此処に遺体を受け入れる前に、ある特殊なウイルスに感染していることが分かってたの。」

「——仏さんがですか？」

「そう、ほらいつか京都のマンションで説明したじゃない・・・私が研究しているインフルエンザウイルス。」

「感染すると、産まれる赤ちゃんが全て女になるって、あれですか？」

笑子が思い出しながら尋ねる。

「でも、胎児だとしてどうして裂傷部位なんかに着床したんですか？」

「卵細胞が裂傷の皮下組織に着床したんじゃないと思う、その部位の体細胞から胎児が発生してるんだわきっと。」

「でも、あのウイルス自体にそんなことは出来ない筈。生殖器官に感染して、逆転写酵素で一部のDNAを書き換えるだけなのに・・・。」

再び長い静寂が続く。

落ち着きを取り戻した女医は、ソファから自分の革張りの椅子に掛け直すと、いつもの長い電子タバコをふかし始めた。

「さっき内閣官房の話をしたのはね、今回の件を内々に政府に伝えてほしいの。随分前から学会には報告上げてるんだけど、人間への感染例が無くてDNAの書き換えや、それに伴う症例が実証できないから、誰も取り合ってくれないのよ。この仏さんのような“異所性妊娠”が典型症状だとすると、早急に感染を抑える必要があるわ、それと・・・。」

振り返って自分のデスクの引き出しを開ける、一本のスピッツを取り出しカップルの目の前で振って見せた。

「小さな銀の粒みたいのが入ってるでしょ。顕微鏡で拡大すると、金属の薄い板なの。表面にQRコードのようなパターンがある、遺体の裂傷部位一面に付着していたからサン

プリングしたの。車の内装素材かも知れないけど、私の専門外だから玲ちゃんに預けるわ。SRI かどこかで分析してみて。」

そう言うと、そのまま電子タバコを深く吸い込んだ。

「それで先生、あの胎児どうするんですか？」

唐突に、笑子が穴見に尋ねる。

「———どうするって？」

「まだ生きてるんでしょ、遺体と切り離して助けるべきじゃないですか？」

短い沈黙が部屋の空気を刷新する。

「———あのね、あれはその部位を含んで一つの遺体なの、代謝が一部継続してるだけのこと。」

「でも、別個体なんでしょ？ 胎児に生きる機会を与えてやってもいいじゃないですか？」

「五体満足の生育は技術的に難しいし、助命したところで誰がどう育てるの？ 其れこそ胎児の不幸でしょ。」

瞼に涙を一杯に溜めた笑子が、訴えるように玲子の顔を見る。

「貴女の気持ちはわかるけど、婦警なら母体保護法は分かるわよね・・・誰もが困ることになるの、胎児の人間としての尊厳も守ってやらないといけないし。」

「尊厳を守る前に、人間としてこの世に生かさせてあげないと・・・。」

そこまで言うと、しゃがみ込んで嗚咽した。

「赤ちゃんが、かわいそうです・・・。」

駐車場へ向かう帰りの道すがら、哀し気に笑子が呟く。

「まだ赤ちゃんとは言えないけど・・・でも、分からないわよ、あの先生やんちゃだから！」

(3)

勤務を終えて舟入本町のマンションに帰ると、笑子の携帯に電話が入った。

「奥寺君からです。勤務明けで申し訳ないけど、ラボまで来て欲しいって、どうします先輩？」

「穴見先生のサンプルも届けなきゃいけないから、一緒に行ってみましょ。」

「近くの中華レストランに誘って、夕ご飯でもおごらせますか！」

SRI のラボに着くと、直ぐにモニター室に案内された。

複数の液晶画面が、同じモノクロの映像を映し出していた。

薄い正六角の各辺から、アンテナのような長い触手が伸びている。

「見覚えありませんか？」奥寺が尋ねる。

「———三次の六角虫ね。」

「そうなのですが・・・これは電子顕微鏡で 10 万倍に拡大した映像です。」

「———10 万倍！」

笑子が甲高く叫んだ。

「10 万倍って、人が作ったロボットでしょ！ 一体どれだけ小さいのよ！」

「0.1 μm 程度、人の細胞の 1/100、インフルエンザウイルスとほぼ同じ大きさだよ。」

「———どこで見つけたの此れ？」

玲子の問いに、奥寺は因島の件を説明した。

「現場で採取したのは、この小さな金属片です。」

と言いながら、ガラスシャーレの中の銀色に輝く金属片を示した。

「矩形の薄い板状で、ルーペでよく見ると表面に QR コードのような格子状のエッチングがあります。ひとつの格子を拡大すると、同じような QR コードがあって、更に拡大するとまた QR コードで・・・結局 10 万倍でこの映像にたどり着きました。」

奥寺がパソコンを操作すると新しい映像が表示される、正方形の格子の中央に六角虫が 6 本の触手を広げた状態で固定されている、一瞬激しく振動したかと思うと、拘束を振り解くように元気に格子から飛び出していった。

「金属片に微弱電流を流すと、今のように飛び出てきます。QR コードに見えるのは、六角虫が居なくなった格子とまだ居る格子とで、光の反射が違うからです。六角虫は格子に固定された状態で、ガンマ線超微細フォトエッチング等の手法で製造されたものだと思います。」

「投棄された外科医療廃棄物の廻りには無数のコバエがたかっていたんですが、捕まえてみると 4 個のローターを持ったマイクロドローンでした。廃棄物の滑らかな表面を選んで、金属片を付着させていたようです。」

「どうして滑らかな表面なの？」

笑子が尋ねる。

「金属片を採取したのが、大きなガラス板の表面だったんだ。マイクロドローンは粗い面と滑らかな面を見分けている、丁度生物の皮膚と粘膜を見分けるように……。」

「生物で思い出したわ、穴見先生からサンプルを預かってる……。」

そう言いながら、玲子がバッグから取り出したスピッツを奪うように手に取ると、「——因島のものと同じですね、どうしたんですか此れ？」今度は奥寺が尋ねる。

今日の大学病院 (Morgue) のことを話すと、「遺体の裂傷部位に付着していたんですね！」何時ものように興奮して、鳥の巣頭を掻き始める。

「玲子さんお願いだ力を貸してください！ 医療廃棄物を不法投棄した犯人を突き止めたんです、SRI のスタッフじゃ専門外で埒が明かないんだ！」

「——分かった、六角虫が絡んでるとなれば、刑事部総動員できるわ。明日から医療関係風潰しに当たってみる。」

(4)

翌日から、県警本部刑事部が玲子の指揮下に動員された。

因島に不法投棄されていた医療廃棄物は、県下複数の医療機関から集められたもので、単一の専門業者を経て正規のルートで廃棄処分される筈だった。

それがその専門業者の経営破綻により、本来のルートを逸脱し一般の産廃業者に流れていた。

広島県下の産廃業者に対する綿密な聞き取り捜査により、3日後に不法投棄を行った業者が摘発された。

医療機関に最終責任を負わせる為の、産業廃棄物管理票（マニフェスト）もこの業者により偽造されたものだった。

県警本部の刑事部屋で頬杖を突きながら玲子がぼやく、「犯人逮捕しても何もならないわね、笑ちゃん。」

ティーポットから玲子のカップに紅茶を注ぎながら笑子が応える、「産廃業者がああ六角虫を造ったとはとても思えないし、割のいい医療廃棄物処理に今回初めて手を出したみたいですし・・・。」

「因島は尾道から近いわね・・・。」

「しまなみ海道の橋を渡れば直ぐです。」

「悪いけど、明日因島に行ってくれない。小野寺亘の痕跡を探してほしいの。」

「六角虫の生みの親ですね。」

「私は、服役中の長谷川仲郎に会ってくる・・・。」

その時、玲子の携帯が鳴動した。

「穴見先生からよ、すぐ来てって！」

穴見から指定された総合病院に着くと、産婦人科のナースセンターに案内される。

いつになく真剣な眼差しの女医が待っていた。

徐に指さした監視窓から新生児室の中を覗くと、そっくりな赤い泣き顔が二つ並んでいた。

「——ああっ可愛い、双子の女の子ですね！」笑子が感激して声を上げる。

「そうじゃないのよ、シーツからはみ出ている二人のお腹をよく見て・・・。」

「——臍の緒がまだついてる？ 出産時に処置しなかったんですか？」

「そうじゃない！ 二人の臍の緒がつながってるでしょ！」

意味が解らない笑子を尻目に、凝視した玲子の顔が蒼白になる。

「穴見先生、これは！」

「そうよ、この赤ちゃんは双子じゃない、臍の緒で繋がった親子なのよ！」

抑えきれない興奮がナースセンターを満たしていた、居た堪れない空気を嫌って三人は、廊下の長いベンチに腰を下ろす。

「昼過ぎにここの院長から電話があって来てみたの。驚いたわ、臍の緒の切断処置部位から胎児が発生している、胎盤のような組織が切断部位を取り巻いてもう一人の赤ちゃんとは繋がっている。」

「——双子では絶対あり得ない事案ですか？」玲子が念を押す。

「あり得ないわ、一卵性双生児で胎盤を共有することはあっても、直接臍の緒がつながることは無い。もっとよく調べないといけないけど、多分左の少し大きな赤ちゃんから、右の小さい方へ酸素や栄養が供給されているんだと思う。」

「あの二人助かるんですか！」笑子が今にも泣き出しそうに尋ねる。

「バイタルを見る限り二人とも健全よ、感染管理もしっかりしているから、問題ないと思う。」

「親御さんは二人とも自分たちの子供として、育てるんでしょうか？」

「そうね、もう少し安定したらお互いの臍の緒を切断して、双子として親に直面させるでしょうね。」

窓外の立木が揺れて、乾燥した葉音が伝わってくる。

夏から秋へ移ろいの足音だった。

(5)

「実は・・・。」

沈み切った空気に更に水を差すような低い声で、女医が続ける。

「赤ちゃんを産んだ母親も、あのインフルエンザウイルスに感染していたの。出産の数日前に私のところに連絡があったわ。」

「——でも、今回は（Morgue）の遺体のような異所性妊娠ではないですよ。」 玲子が確認する。

「母親に関してはその通り、でも臍の緒の切断面から発生したとすると、親の赤ちゃんからすれば異所性妊娠よ。」

廊下の奥からストレッチャーを動かす金属音が聞こえてくる、慣れない看護師のようで、壁のガードにストレッチャーを擦る音が時折混ざる。

「あのインフルエンザウイルスに関しては、ひとつ重要なことが分かったの。逆転写酵素によって、人の DNA を書き換えるんだけど、書き換えられた細胞が初期化（リプログラミング）されるケースが確認されたわ。」

「——リプログラミング？」

「人が創傷を負うと、その部位の細胞が肉芽組織を形成して裂傷を補修するようになる。盛んに細胞分裂を繰り返して欠損部位を補填していくわけね。でも、あくまで元あった組織を再現するだけで、他の組織や臓器には絶対なれないわ。ところがリプログラミングされた細胞は分化万能性を獲得して、あらゆる組織や臓器に分化出来るのよ。」

「——IPS 細胞と同様ですね。」

「胎盤や胎児にもなれるんですか？」 うなだれていた笑子が顔を上げて尋ねる。

女医が、ゆっくりと頭を下げて肯定した。

「あの（Morgue）の胎児はどうしたんですか！」 思い出したように笑子が甲高く尋ねた。

「死んだわ、やはり母体からの酸素と栄養の供給が断たれるとどうしようもないわね、あんたたちが帰った後、直ぐに亡くなったわ。」

虚脱感と共に、深刻な疲労を 3 人共通に感じていた。

窓外に街灯が点灯して、早まる日暮れを伝えている。

「今日は疲れたわ、もう帰るわね。」

ベンチから立ち上がってその場を去ろうとする女医を引き留めながら、「先生、SRI の奥寺君を交えた 3 人で、情報を共有したいと思うんです。お時間頂けないですか？」

玲子の声に振り返りながら、「いいわよ、明後日の午後なら時間空いてるわ。あんたたちのマンションにお邪魔してもいいの？」

顰め面の笑子を横目に見ながら、「———お願いします。」

長谷川仲郎が服役している広島刑務所は、カップルのマンションがある舟入本町から徒歩圏内だった。

面会室に現れた長谷川は、以前より血色もよく元気そうだった。

「お久しぶりね、元気そうじゃない？」玲子が切り出す。

「無期懲役の身に、元気もないでしょう。今日はどのような用件ですか？」

「お父様の六角虫に関して、少し質問したいの。」

「公判で何度も説明しましたが・・・しかしまあ、私の心情を汲み取って証言頂いた黒木さんの事ですから、何なりと聞いてください。」

「最初お父様は、どのような方法で六角虫を製造されていたの？」

「全メタル対応の3Dプリンターで、同じものをひとつずつ作っていました。500個くらい溜まったところで、いろんな形にトランスフォームするのを見せて貰って。ただ、あんな怪物になるとは思ってもみませんでした。」

「お父様は、六角虫を将来的にどのように使いたいと思っていたの？」

「それは分かりませんが・・・ただ、もっと小さく大量に作りたいとは、口癖のように言っていました。」

「それで、ガンマ線による微細加工の技術を教えたわけ？」

「まあ、そうです。ガンマ線超微細フォトエッチングなら、3Dプリンターより遥かに小さく大量に生産できます。」

「———ウイルス位のサイズも可能？」

「可能ですが、六角虫がその後どうかしたんですか？ そういえば当時父は、分子生物学の専門家を探しているようでしたが・・・。」

広島刑務所を後にして帰途に就いた玲子に、笑子から着信があった。

「小野寺亘の痕跡がありました！ 因島在住の小倉圭三という科学者と頻繁に会っていました。」

「———分子生物学者？」

「おっしゃる通りです、私はここでその学者についてももう少し調べて帰ります。」

(6)

舟入本町の街路樹を見下ろすカップル自慢のヌックは、奥寺に穴見、研修を終えて県警本部に帰ってきたジョン・クアリを加えて賑やかだった。

「笑子さんはどうしたんですか？」奥寺が尋ねる。

「因島に行って貰ってるの……。」果物を盛った大皿を運びながら玲子が応える。

「不法投棄の現場ですか？」

「現場からは何も出ないと思う、近くの集落の聞き込みをやって貰ってるの。」

「我々もやりましたけど……。」

「——餅は餅屋よ。小野寺亘がコンタクトしていた小倉圭三という分子生物学者について調べてるわ。」

小野寺亘と聞いてジョン・クアリが気味悪そうな顔をする。

直後に女医の表情が一瞬変わったのを、玲子は見逃さなかった。

秋が近いとはいえ、昼下がりの陽光はまだまだ強い、眼下の街路樹の日焼けした緑が眩しかった。

「あの総合病院の産婦人科病棟からも、マイクロドローンのコバエが発見されたんでしょ？」

注がれた紅茶をカップから啜っていた穴見が、奥寺に尋ねる。

「——その通りです、病院から依頼があって空調フィルターを調べたら、20匹ほど発見しました。」

「繋がっていた臍の緒の組織からも、あんたたちの言う六角虫が大量に発見されたわ。どうやら、今回の異所性妊娠には、インフルエンザウイルスと六角虫が相互に係わっているね。」

「健康な女性はそのインフルエンザに感染して、体細胞が分化万能性を獲得したとして、女性はどうなるんですか？」玲子が穴見のティーカップに紅茶を注ぎ足しながら、尋ねる。

「どうにもならないわ。今回のような臍の緒の処置創傷、交通事故の裂傷等で細胞分裂が一気に高まる状況が無ければ、分化万能性も表に出てこない。更にそんな状況でも余程のことが無い限り、胎盤や胎児に分化することはあり得ないのよ。」

「——余程の事って？」

奥寺が割って入る、「六角虫は、生体の組織内でどんな形にでもトランスフォーム出来る筈です。分化万能細胞が盛んに分裂している近傍で、初期の胎盤や胚の形を与えてやれば……。」

「鋳型による細胞集合の誘導ね・・・可能性はあるけど、それだけじゃ無理だと思う。生体組織の形態や構造を決定するのは、細胞同士のコンタクトやコミュニケーション・・・人間はね、60兆個の細胞で出来てるの、細胞同士の“社会”が存在するのよ、その規模は人間社会の一万倍。それが、タンパク質や酵素といった言語を使って、人間の体の形態・構造・機能を決めているの。金属の鋳型だけじゃ血管の一本も作れないと思う。」

リングの一切れを口に運びながら、奥寺が続ける。

「―――確かに、六角虫を人工的に作った人の体液の中で観察すると、此れといったトランスフォームは殆どしませんね。2匹対になって向かい合い、6本の触手を突き合わせて、丸い提灯籠のようになって浮かんでいるだけです。」

「―――触手って何なの？」穴見が窓下の街路樹を見ながら、ぼんやりと尋ねる。

「電極です。先端に磁力線が集中していて互いに強く固着します。」

「提灯籠の内外で、体液の組成に何か違いがあるんじゃないの？」

それを聞いた途端、奥寺が飛び上がった。

「し、失礼します！ 急いで帰って確認しなきゃ！」

「私も用事思い出した、帰るわね！」

後には呆れ顔の玲子と、口いっぱいバナナを頬張ったジョン・クアリだけが残された。

(7)

「ごめんなさいね、小倉圭三って名前に心当たりがあったものだから、急いで帰って住所録のファイルを検索してみたかったの・・・。」

翌日、玲子が穴見から詫びの電話を受けたのは、奥寺のラボに向かう車中だった。

「ファイルには登録して無かったけど、古い名刺入れの中に見つけ出した・・・九州大学で分子生物学を教えていたわ、印象が薄いんだけど私の恩師でもあるわね。」

「———どんな先生なんですか？」

「リボソーム外で、アミノ酸からタンパク質を人工合成する分野の黎明期の学者ね。アメリカの研究チームとの競争で、結局わが国では日の目を見なかった研究テーマなの。」

「———よく分かりません。」

「まあ、アミノ酸やたんぱく質の専門家ってところ。」

SRIのラボに到着して、奥寺に女医の電話の内容を伝えると、我が意を得たように拳を握り締めた。

「ちょっと専門的な説明になりますが、我慢して聞いてください。分からない部分は聞き飛ばしてもらってOKです。」

そう言ってパソコンを操作すると、モニターに六角虫が映し出される。

向き合った2匹の触手の先端が繋がって、球体を取り巻く経線のように、丸い提灯籠形を呈している。

「穴見先生は、この提灯籠の内外で体液の組成が違うと言いましたが、違っていたのはpHでした。」

「———pH?」

「水素イオン濃度です。触手に印加することでイオンの濃度を変えられます。更に、印加する電圧を調整することで、籠の中のpHを自由にコントロール出来るんです。」

「———それで?」

「人間の体液中に存在するアミノ酸は20種類だと言われています。そして、その20種類の“等電点”が其々微妙に違うんです。」

「———等電点?」

「体液中のアミノ酸の電荷がゼロになる、体液のpHです。」

「———よく分からない?」

「兎に角、籠の中のpHを調整することで、20種類の中から必要なアミノ酸だけを提灯籠の中に取り込むことが出来ると考えて下さい。」

「仮に今触手の電圧を調整して、籠の中にAというアミノ酸を取り込みます。次に電圧を変えてBを取り込む、続けてD、C、Eと・・・提灯籠の中を流れる電気エネルギーで、

アミノ酸が順番にペプチド結合します。触手の電圧を順番に変えてゆくことで、意図した序列のポリペプチド、つまりタンパク質を合成できるんです！」

「どういう事？」

「つまり六角虫がタンパク質という言語を獲得して、穴見先生の言う 60 兆個の細胞同士の“社会”の一員の資格を得たという事です。」

「タンパク質が言語と言うのがよく分からないけど……。」

「タンパク質や酵素は、多種のアミノ酸がペプチド結合した長い鎖なんですが、自らを折り畳んだ 3 次元構造（フォールディング）によって、生体内で様々な作用を醸し出します。まるでそれは、細胞間のコミュニケーションを司る言語のような働きなんです。」

「じゃ、六角虫は周りの細胞とコミュニケーションを取るために、その場で必要な種類のたんぱく質を合成してるってこと？」

その時、玲子の携帯がコールされた、因島の笑子からだった。

(8)

「——笑子です。小倉圭三の潜伏先を突き止めました、位置情報を送付します。近くの住民の話では、一年ほど前から若い女性と二人で住んでいるようですが、ここ一週間本人を見かけないそうです。一緒に住んでる女性もちょっと変わってしまっていて、周りの住民とは一切口を利かないんだそうです。私、暫くここで張り込みます。」

「潜伏先だなんて！——分かった、私もこれからジョン・クアリと一緒にそっちへ行くわ。それと、まだ事件だって確定した訳じゃないから、くれぐれも軽はずみに先走りしないでね。」

因島田熊の高台にある小さな住宅を、近くの駐車場から笑子が監視している。

瀬戸内の海風が、湿った磯の香りを運んでくる。

以前、大分の漁村で、玲子と一緒に解決した木造潜水艦の事件を思い出した。

磯の香りは、同じような汀の佇まいを人々に想起させる。

しかし笑子は沖縄出身である、沖縄の海に磯の香りは無い。

住宅のテラス戸が僅かに開いた内側から、レースのカーテンがはためいている。

その瞬間、磯の香りの中に微かに違和感を感じ取った。

駐車場の脇を抜けて、徒歩で近づく。

アプローチ奥の玄関ドアには、鍵が掛かっていなかった。

ドアを開けると違和感が一層強くなって確信した、死臭である！

靴を脱がない洋風の廊下を奥に進むと、死臭はますます強くなる。

細かい砂が床一面を覆って、人の生活感が無い。

背後に異様な気配を感じて廊下を振り返る、入ってきた玄関ドアから夕陽が差し込んでいた。

一番奥の部屋に白いシーツで覆われた大きなベッドが置かれている、シーツをめくると年老いた男性の痩せ細った遺体が横たわっていた。

所々腐敗が始まって酷い状態だった。

スマホで撮影して現場保存、所轄の警察に電話を掛けようとしたその時だった！

床から腕が伸びてきて両足首を掴まれる、前のめりに倒れこんだ背後から馬乗りに抑え込まれた。

必死に抵抗して体を起こす、悪意に満ちたスキンヘッドの顔が、肩越しに見えた。

女だった！ 全裸の女が両手両足にしがみ付いている。

片足をロックされ、物凄い力で仰向けに返されると、白い腕が首を絞めてきた。
息が出来ずに必死でもがく、頸椎の骨がギシギシ音を立てる、視界が暗くなって意識が遠のく。

虚ろな意識の中で、玲子の名を叫んだその刹那！ 鋭い風切り音と鈍い衝撃！ 男の怒号と同時に首の圧迫が消滅して、磯の香りが二つの肺に流れ込んできた。

エピローグ

医師会病院の病室にも、磯の香りが満ちていた。

笑子のベッドの廻りを、玲子・穴見・奥寺・ジョン・クアリが明るい顔で取り囲んでいる。

「じゃ、床の砂がみんな六角虫だったんですか？」

「———そう、あなたの背後でトランフォームして、襲ってきたのね。」

「物凄い力でした、県警の道場で男の警官をいつも投げ飛ばしますけど、あんなのは初めてでした。」

「ジョン・クアリがいなかったら、今頃あんた天国だったわよね。」穴見が茶化す。

「石をぶつけられて、あの女どうなったんですか？」

「トランフォームが解けて砂の山になったの、奥寺君が風呂の水をバケツで掛けたら動かなくなったわ。」玲子が、お茶のペットボトルをみんなに配りながら答える。

「触手の絶縁が不十分で大量の水を浴びると、内部ショートを起こすんだ。三次の怪物が最初に現れた時も、きっと雷雨を避ける為に、移動する必要があったんだと思う。」

「やっぱりあれは、三次の観音像の足元で起動された“システム B”なんですか？」

「———間違いないでしょうね、観音像のメンテナンスハッチを開けて、しまなみ海道通って、あの高台の家まで逃げてきたのよ。砂粒が地面を移動しても、みんな気付かないでしょ。」

「今あの住宅は、うちのスタッフが張り付いて捜査しているけど、既に数匹のマイクロドローンと、QR コードの金属片が大量に見つかっている。小野寺亘と小倉圭三が協力して、あの 10 万倍の六角虫を作ったのは間違いない。」奥寺が確信に満ちた目で呟く。

「———じゃ、10 万倍の六角虫が“システム C”になるんでしょうか？」

「システム C は、ショートしないの？」穴見が振り返って奥寺に尋ねる。

「其処は改善されているようです。触手の可動範囲が小さくなって、人の体液の中でも絶縁を維持できるようです。」

「ベッドの遺体が小倉圭三なんだろうけど、死後 8 日くらい。これから解剖だけど、死因は多分心筋梗塞だと思う。小倉が死んだあとあの女“システム B”はどうしてたの……？」

「寝室の隣の部屋が、恐らく小倉の研究室だと思いますが、樹脂製のパレットが壁の棚から引き出されて散らかっていました。マイクロドローンにフォトエッチングで製造した金属片をセットしたものを、大量に保管していた容器だと思います。不法投棄された現場はあの家からすぐ近くです、システム B が持ち出して現場で放ったんだと思います。産廃業者の車に紛れ込んだ数十匹が、広島で異所性妊娠を起こしたんです。」

「そういったロボット達の自立制御の大元は何なの？」

「システム A のデータフィールドを解析したときに感じたんですが、自立制御、自発判断等アルゴリズムの根源は、どうやら様々な分野のビッグデータのようです。」

「じゃ、システム C のタンパク質の合成は、分子生物学のビッグデータから？」

「———そうだと思います。全ての六角虫のデータフィールドに共通のファイルが存在します。」

隣の井口島との間の、狭い水道の真ん中で、漁船と観光船がゆっくりと交差する。

時間の移ろいも、ゆったりと穏やかだった。

窓際のソファに深々と腰を下ろした穴見が、しんみりとした口調で話し始める。

「今度の事件の要目は、妊娠という複雑な生命活動に、機械が直接関与したという事。60兆個の細胞社会に無理やり割り込んで、タンパク質の声で扇動したのよ。京都山科の私のマンションで、DNA のデータだけで笑ちゃんの体を完全に再現できるって言ったことがあるけど、今此処で、本人の前で撤回するわ。あんたの体は、人間社会の一万倍も複雑なの。でも、その複雑な社会も、僅かな雑音であらぬ方向に扇動される、異所性妊娠の一端を担ったインフルエンザに関して、もっと警鐘を鳴らす必要があるわね。」

「三浦官房副長官へのアポイントは取れています。」玲子が応えた。

大学病院で小倉圭三の解剖を終えた穴見が、自室に帰る前に研究棟の一番奥、標本保管区画のドアを開けた。

保管グリッドからステンレスのパレットを引き出すと、生命維持装置に繋がれた肉塊が現れる、交通事故の裂傷部位に着床した、あの胎児だった。

THE END

本編は全てフィクションであり、特定の個人・団体等と一切の関係がありません。

悪しからずご了承ください。

尚、表紙の画像は PhotoAC より転載させて頂きました。

生き物のからくり

著 南海部 覚悟

制作 Puboo
発行所 デザインエッグ株式会社
